



展覧会：であう、はじまる—画家たちの初期作品

会期：4月26日(土) — 9月23日(火・祝)

場所：上原美術館 近代館

今では巨匠と呼ばれる画家たちにも、そのはじまりがあります。若く名もなき画家はさまざまな人や芸術と出あい、心を揺さぶられ、そして自らの表現の道を歩みはじめます。本展では画家たちの若き感性があふれる初期作品をご紹介します、その芸術の魅力と本質に迫ります。

《科学と慈愛》はピカソ 15 歳のときの作品です。幼少の頃より美術教師の父に絵の手ほどきを受けたピカソは、官展のために大作の準備を重ねます。その最終準備作がこの油彩画です。ピカソはこの絵を縦 2 メートルの大作に仕上げ、マラガの展覧会で金賞を受賞。そしてピカソの画家としての人生がはじまります。

《アニエール、洗濯船》はシニャック 18 歳の作品。自身の作品帖には最初の番号が振られています。シニャックは 16 歳の頃、モネに憧れて画家を志しました。セーヌ川の輝くみなもは、モネを思わせる筆触分割で描かれており、理論的な点描主義に至っていない、若き画家の瑞々しい感性にあふれています。

そのほか、駆け出しのゴッホが憧れのミレーの小さな版画を懸命に模写した《鎌で刈る人(ミレーによる)》、株式仲買人の仕事をしていたゴーギャンが日曜画家として描いた最初期の油彩画《森の中、サン＝クルー》、自らの芸術を模索する若き梅原龍三郎が師ルノワールに見せ助言を受けた《モレー風景》、西洋美術研究のため大学院を中退してスペインに渡った須田国太郎がその地の風景を描いた《山の斜面》など、画家たちの初期作品をご紹介します。

上原コレクションには、画家たちのはじまりの作品が多くあります。そこには画家の人間性を見つめるコレクターの小さくやさしい「まなざし」にあふれています。画家たちの初期作品を通じて、上原コレクションの魅力をどうぞお楽しみください。

【近代館 第1展示室】 企画展：であう、はじまる一画家たちの初期作品



1. パブロ・ピカソ 科学と慈愛

1897 年 油彩、カンヴァス 39.0×50.5cm

Pablo Ruiz Picasso, *Science et charité*

No Image

薄暗い部屋に一人の病人が横たわります。その傍らの医師は脈を取るだけですが、幼児を抱く修道女は一杯の水を差し出し、その心を癒します。

本作はピカソ 15 歳のときの作品です。幼少の頃より美術教師の父に絵の手ほどきを受けたピカソは、官展のために大作の準備を重ねます。その最終準備作がこの油彩画です。ピカソはこの絵を縦 2 メートルの大作に仕上げ、マラガの展覧会で金賞を受賞。そしてピカソの画家としての人生がはじまります。

ピカソは最終準備作となった本作を最期まで手元に残しました。この作品とともに写る 80 代のピカソの写真が残されています(参考写真)。本作は没後、ピカソの娘マヤ・ピカソに引き継がれ、今では上原美術館に納められています。

No Image

【参考写真】

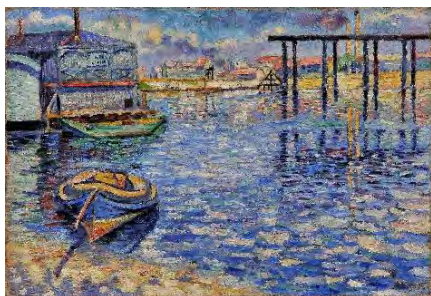
本作の傍に立つ 80 代のピカソ、1960 年代

画像出典：Ciencia y Caridad al Descubierto. Museo Picasso, 2010.

2.ポール・シニャック アニエール、洗濯船

1882 年 油彩、カンヴァス 38.6×56.0cm

Paul Signac, *Asnières, bateau lavoir*



セーヌの川岸に小舟が一隻、泊まっています。本作はシニャック 18 歳の油彩画で、画家の覚書には最初の番号が付されています。きらめくみなもに彩られたその舟は、光に満ちた世界へと旅立つ希望をあらわすかのようです。画面右上には石炭用クレーンの橋脚が立ち、対岸に見える工場の煙とともに、活気ある 19 世紀のパリ近郊の様子を伝えています。

パリの裕福な家に生まれたシニャックは 16 歳で父を亡くし、パリ対岸のアニエールに移り住みます。この頃より印象派の影響を受けながら独学で絵を描き始めました。特に影響を受けたのはモネで、面識のないモネに面会を申し込む手紙を書くほどでした。16 歳のときには第 5 回印象派展を訪れ、模写をしていたところゴーギャンに注意されることもありました。

憧れの画家たちに影響を受けながら描き始めたみなもの輝きには、まだ理論的な転用に至っていない、若き画家の瑞々しい感性が溢れています。

3.フィンセント・ファン・ゴッホ 鎌で刈る人(ミレーによる)

1880 年頃 鉛筆・水彩、紙 55.5×30.5cm

Vincent van Gogh, *Moissonneur à la faucille (d'après Millet)*



実りを迎えた麦畑で一心に刈り入れをする農夫。その動作はぎこちなくも力強く大地を踏みしめます。本作はゴッホが 27 歳頃に描いたもの。ゴッホは画商や教師などの職を転々とし、父と同じ牧師を目指すも 27 歳で挫折。悲壮の中で画家を志しました。ゴッホは画業のはじまりに敬愛するミレーを独学で模写します。その多くがゴッホによって破棄されましたが、本作は奇跡的に残った 1 点です。ゴッホが描く「鎌で刈る人」と「種をまく人」は死と生がテーマを暗示し、画家の深い精神性があらわれています。



【参考図版】

ジャン＝フランソワ・ミレー原画
《鎌で刈る人》1853 年
木版画 13.5×7.5cm

4.ポール・ゴーギャン 森の中、サン＝クルー

1873 年 油彩、カンヴァス（カルトン張り） 24.8×34.5cm

Paul Gauguin, *Dans la forêt, Saint-Cloud*

田舎道の木陰に女性たちが腰を下ろしています。膨らんだスカートは当時流行した夏の装いで、女性たちの楽しいな雰囲気が伝わってきます。

本作はゴーギャンが 25 歳で描いた最初期の風景画。ゴーギャンは生後間もなくペルーに渡り、7 歳でフランスに帰国。学校卒業後は船乗り見習いとなり、海軍に入っ



て世界の海を巡ります。23 歳で再びパリへ戻り、母の友人で資産家のアローザの紹介で株式仲買商として働き始めました。彼の邸宅近くで描いたのが本作です。その翌年、ゴーギャンはアローザの紹介で知り合ったデンマーク人メットと結婚します。

ゴーギャンの人生は順風満帆でしたが、株の大暴落で職を失い、画家を志します。貧困の中、家を離れてパリやブルターニュで制作。ついにはタヒチへ旅立ち、妻の元へ帰ることはありませんでした。この絵はゴーギャンの妻メットが生涯手元に置いたもの。このはじまりの絵画には、二人の夢くも幸せだった時間が詰め込まれています。

一梅原龍三郎 ルノワールとであう

5-1.撮影者不明 写真「関西美術院にて」 個人蔵(梅原龍三郎旧蔵)

1907(明治 40)年 写真

Photographer unknown, *Photograph, in Kansai-Bijyutsu-In*

* 左から 3 人目、手前に立つのが梅原龍三郎

No Image

5-2.撮影者不明 写真「関西美術院にて」 個人蔵(梅原龍三郎旧蔵)

1907(明治 40)年 写真

Photographer unknown, *Photograph, in Kansai-Bijyutsu-In*

* 左が梅原龍三郎、その右隣に安井曾太郎がいる

No Image

梅原龍三郎は 1888(明治 21)年、京都市下京区の芦刈山町に生まれました。生家は着物の悉皆屋(着物の制作を取りまとめる役目)で、小さな頃から色彩や図案が身の回りにある環境でした。16 歳の頃には学校を退学して、伊藤快彦の家塾・鐘美会に入り洋画を学び始めます。間もなく鐘美会は浅井忠の聖護院洋画研究所(2 年後には関西美術院に発展)と合併し、梅原は浅井の指導を受けます。研究所の同級生には安井曾太郎がいました。そこでははじめ徹底

的にデッサンを学びます。梅原の回想によれば、鉛筆画が「かなり出来ないと彩画のおゆるしがでなかった」といいます。また、浅井は生徒に「正確に、しかしじゃんぐり(やわらかく)描け」と教えました。当時の水彩画は浅井の表現を連想させます。この研究所で十代の梅原と安井は絵画表現の基礎を徹底的に学びました。

6. 梅原龍三郎 滞欧日記 個人蔵(梅原龍三郎旧蔵)

1908(明治 41)―1913(大正 2)年

Ryuzaburo Umehara, *Diaries in Europe*

No Image

1908(明治 41)年 5 月、20 歳の梅原龍三郎は友人の田中喜作とともに神奈川丸で日本を出発、マルセイユを経由して、7 月 19 日にパリに到着しました。同日の日記には、「巴里 Gare de Ryon に着く 安井君 津田君の顔が見えてうれしい」とあり、関西美術院の同級生で、先にパリに渡っていた安井曾太郎と津田清楓がリヨン駅に迎えに来ていたことが分かります。その後、四人馬車でホテル・スフローに向かい、「蜂の巣の如きに驚く」と記されています。そこには 20 世紀初頭のパリに到着した若き画家の新鮮なまなざしが感じられます。

日記を紐解くと、日々、美術館や画廊巡りを行っているほか、演劇にものめり込んでいたことが分かります。またパリで知り合った有島生馬や高村光太郎の名前も出てきます。異国の地でさまざまなことを吸収する 20 歳になった梅原の等身大の姿が浮かび上がります。

7-1. 梅原龍三郎 両親宛書簡 個人蔵(梅原龍三郎旧蔵)

1908(明治 41)年 1 月 28 日付 マントンより

Ryuzaburo Umehara, *Letter to Parents*

No Image

7-2. 梅原龍三郎 田中喜作宛書簡 個人蔵(梅原龍三郎旧蔵)

1908(明治 41)年 2 月 13 日付 パリより

Ryuzaburo Umehara, *Letter to Kisaku Tanaka*

No Image

1909(明治 42)年 1 月、梅原はパリで知り合った画家・有島壬生馬(生馬)に誘われて、南仏マントンへ旅をします。マントンでは有島に紹介された宿に滞在しました。そこで撮影した写真を葉書にして父に送りました。葉書裏には「裏の寫眞ハ宿の人が宿の庭にて撮つて来れしもの」と記されています。また、市の来賓として舞踏会に招かれたことも書かれています。ここで梅原は近くに住むルノワールに会いに行くか逡巡の末、2 月にカーニュ＝シュル＝メールを訪ねます。

下の葉書は、ルノワールに会った後、パリに帰って間もなくの 2 月 19 日に田中喜作に宛てて書いた葉書です。田中は梅原とともに前年、パリに来たばかりでしたが、病気のため間

もなく帰国しました。そこには「君ハ『ツラデシヨネル(引用註：伝統)が必ずとも悪くハなからふが』なに 悪い共 悪い共 必ずとも悪い 其ハ五十年前ニ既ニモネヤルノワールが明らかにさとつた事だ」と芸術論が交わされています。

7-3.梅原龍三郎 観劇日記 個人蔵(梅原龍三郎旧蔵)

1910(明治 43)年

Ryuzaburo Umehara, *Diary*

* 演劇のチケットや俳優などについてが記されている

No Image

7-4. 梅原龍三郎 スケッチブック 個人蔵(梅原龍三郎旧蔵)

1908(明治 42)年—1913(大正 2)年頃

Ryuzaburo Umehara, *Sketchbook*

* 舞台装置のスケッチと思われる

No Image

梅原は 1908(明治 41)年から 4 年間、フランスに滞在します。その間、特に絵画を学びますが、もう一つ興味を持っていたのが演劇です。滞欧中はしばしば観劇し、多くの記録ノートを残しています。ノートには演目や劇場名、配役が記されたほか、チケットが貼り付けられたものもあります。また、1912(明治 45)年に忠臣蔵を翻案した『日本の誉』がオデオン座で上演される際には、アドバイスもしました。

梅原はヨーロッパから帰国の際、実は演劇の道に進もうとしていました。梅原は次のように回想します。「ここに特記しなければならないことがある。それは歸途シベリア鉄道中は、日本へ歸つたら、畫家をやめて、演劇演出方面に進出しようとの考えをいよいよ固めていた。この考えは滞仏中からの構想で、そのためにも随分資料を集めていたのである。ところが日本に上陸してみると、人は総べて畫家として迎え、むしろ畫家たることが抜き差しならなくなつた。持参の資料は園池公功を介して帝國劇場の圖書部に寄贈し、一これは大震災で焼失したが一結局改めて畫家としての道を進むことになった」。

8.梅原龍三郎 パリー女

1909(明治 42)年 油彩、カンヴァス 46.4×38.4cm

Ryuzaburo Umehara, *Lady in Paris*

梅原はパリで美術館や画廊を巡るうちに次第にルノワールの絵画に深く魅了されます。その想いは日ごとに高まり 1909(明治 42)年 2 月、逡巡の末、南仏カーニュ＝シュル＝メールに住むルノワールに直接会いに行くことを決意します。「さあさあ奮発せん。私は彼に見られるに値する、私は彼の芸術をあまりに愛する。彼はそれを

No Image

知らねばならぬ」。

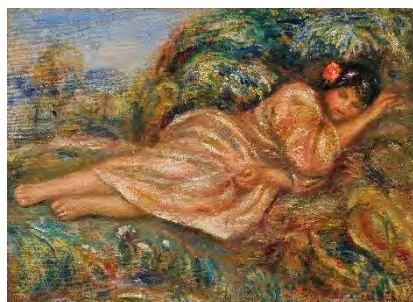
友人の有島生馬らが滞在する南仏マントンを訪ねた後、梅原はひとりカーニュの駅に降り立ちました。郵便配達人に道を聞きながら、ようやく丘の上にあるルノワールの家を訪ねると、70歳のルノワールは予期せぬ珍客に驚きながらも梅原を温かく迎えます。そして二人の交友がはじまりました。

本作はちょうどルノワールに会った頃に描かれた作品です。明るい色彩や女性の肌の表現はルノワールの絵画を想起させます。梅原はルノワールに「君は色彩を持つ」と評されました。梅原はその後、ますます色彩の可能性を探究するようになります。

9.オーギュスト・ルノワール 横になった婦人

1912年 油彩、カンヴァス 24.5×33.3cm

Pierre-Auguste Renoir, *Femme couchée*



1909(明治42)年2月、紹介状もなしにルノワールの家に辿り着いた梅原はその扉を叩きました。そこで出てきたのがこの絵に描かれた女性ガブリエルです。ガブリエルはルノワールの妻の姪で、家事手伝いをしていたほか、ルノワールのお気に入りのモデルとして様々な作品に描かれていました。梅原によると、ガブリエルは「『日本からルノワール先生を見に来た』と言ふ私を驚いて内に導いた」といいます。そして、ついにルノワールとの面会を果たしました。「其時の先生の顔が絶えず思ひ出される。待ち受けない珍奇なる客を見て、如何なる言葉を將にきかんとするかを想像し得ないそれは以来再び見なかつた顔であつた」。そう梅原は回想します。ルノワールは梅原を画室に案内し、制作の様子を見せました。「画を成すのは手でない眼だ、自然をよく御覧なさい」。

その後、昼食を一緒に取り、海に見える美しい庭をルノワールと散歩しました。「私はこんな幸福な時を持つだらうとは此の朝まで決して想像出来なかった」。そして、二人の交流が続きます。

10.梅原龍三郎 モレー風景

1911(明治44)年 油彩、カンヴァス 61.2×73.4cm

Ryuzaburo Umehara, *Landscape of Moret-sur-Loing*

1911(明治44)年の夏、梅原は風邪をこじらせ、パリ近郊のモレー＝シュル＝ロワンで静養します。回復した梅原は現地で本作を含む風景画を数枚描きました。8月末にパリへ戻った際、不満足な出来ながらも、ルノワールにそれらの作品を見せました。ルノワールは、

「エ、君は甚だ仕事に不満足だと言うて居たが、君は六ヶ敷い人なのか、どうしてこれでさう不満足なのか さう一朝にして甚だよいものは出来ない事だ、さあそんなに満足でなければ私が明後日から近郊に寫生に行くから一緒に来て見ないか、何か君に得る處でもあれば幸だから」と梅原をパリ近郊のシャビルへ写生旅行に誘いました。

No Image

梅原はシャビルで思うように制作が進みませんでした。ルノワールは「君は先づ眺めてみることは甚だいい。先づ見ることによって解さねばならん」と助言します。そうした時間は梅原にとって大切な思い出となりました。

11.梅原龍三郎 ナルシス 個人蔵

1913(大正 2)年 パステル、紙 42.5×32.2cm

Ryuzaburo Umehara, *Narcissus*

No Image

1912(明治 45)年、梅原はイタリアへ旅行し、ナポリ、ヴェローナ、ヴェニス、ミラノ、フィレンツェ、ローマを周遊します。特にナポリに魅了され、1 ヶ月ほど滞在しました。

イタリアからパリに戻って描いたのがこの作品です。ここに描かれているのはギリシャ神話に登場するナルシス(ナルキッソス)。ナポリの遺跡ポンペイの壁画に想を得て描かれました。ナルシスは水面に映った自分に恋こがれて死んでしまったとされていますが、本作では盥の水を見つめています。

梅原はルノワールの助言もあり、目で見たものを描くことを重視しました。本作に描かれたモチーフも、背景は「青い壁紙を買い、かけてある布は近所のデパートに行って探して来たもの」であるといえます。生命力溢れる鮮やかな色彩には、イタリアで多様な芸術と出会い、自らの感性を広げていく若き梅原の姿があらわれているかのようです。

12.梅原龍三郎 ナルシース

1918(大正 7)年 デトランプ、紙 61.5×46.5cm

Ryuzaburo Umehara, *Narcissus*

1913(大正 2)年、梅原は4年間の滞仏を経て帰国します。「其後、私が絶えず何んでもいゝものを作り度いと思ふ時、ルノワール先生に見せると云ふことが其目的となつて居た」、そう梅原は述べています。

しかし、梅原にとってルノワールの影響は大きく、それゆえ自らの

No Image

芸術をどのように確立するか苦闘します。「私がルノワールに逢ひ、あゝいふ立派な美術家の生活を知ることを得たのは非常に徳としてゐるが、他面そのため無意識だが、自分に不自由になつたといふことを考えへてゐる。逢はなかつた方がもつと存分に怖れなく伸びていたのではないかと内心思ふことがよくある。一しかしルノワールに逢つたことで、根本を迷ふことがないので、やはり結局は得をしてゐるのかも知れぬが」。

梅原は帰国後、大和絵や浮世絵など日本美術に影響を受けます。帰国から 5 年後に描かれたこのナルシスは、大和絵のような装飾性に満ちています。梅原は本作を描いた翌年に生まれた息子を「成四」と名付けました。

13.梅原龍三郎 牡丹

1925(大正 14)年 油彩、カンヴァス 37.2×39.2cm

Ryuzaburo Umehara, *Peonies*

No Image

1919(大正 8)年冬、梅原は伊豆・網代に滞在中、ルノワールの訃報に接しました。「ルノワール先生の死んだことを知って足もとから地が裂けて来た様な驚きと悲しみに打たれた」。翌年、梅原は自邸を売って渡航費を工面して二度目の渡仏を果たし、ルノワール宅を弔問します。そこでは、お手伝いをしていた女性ガブリエルやルノワールの息子で映画監督のジャンと会い、ルノワールの思い出を語り合います。滞在中、ジャンの夜会に招かれた梅原は、そこで画家アンリ・マティスと出会いました。その後、アトリエを訪ねた梅原にマティスは「自分がルノワールと識つたのは近年である。君が早くから彼と識つたのは羨ましい。実際、ルノワールのごとく老来益々仕事のよくなつた人は古来稀であらう」と述べたといひます。その 4 年後に描かれた本作は、ルノワールのやわらかな色彩を想起させ、そこには師への敬愛が息づいています。

14.梅原龍三郎 二裸婦 新収蔵・初公開

1927-1930(昭和 2-5)年頃 岩彩・墨、紙 22.0×31.6cm

Ryuzaburo Umehara, *Two nudes*

No Image

梅原は師ルノワール弔問のために訪れた 2 回目の渡仏から帰国後、重点的に裸婦を描いています。弔問の際にはルノワールが晩年に描いた大作《パリスの審判》を目にしています。「五十号位のパリス審判図のほゞ同図なのが三つもあり、裸婦、花、景色大小無数がうなりを発して輝いてゐる」。また、梅原はこの頃、浮世絵を収集するなど、

伝統的な日本美術の影響も取り入れていました。髪を結う女性の主題は、鈴木春信などの浮世絵に由来すると考えられます。梅原は本作において、大衆芸術である浮世絵や大津絵がもつ力強さを、少ない色数と単純な構成、強い筆線を用いて水彩画に展開しています。こうした作品からは梅原がこの時期、ルノワールの影響を越えて、西洋と東洋の芸術を融合しようと試みていたことが分かります。

一安井曾太郎 セザンヌに魅せられる

15.安井曾太郎 樹木

1904-1907(明治 37-40)年頃 鉛筆、紙 52.7×64.8cm

Sotaro Yasui, *Trees*



1888(明治 21)年、京都市下京区(現・中京区)の木綿問屋に生まれた安井曾太郎は、15歳のときに画家を志して京都市立商業学校を中途退学。翌年、浅井忠が主催する聖護院洋画研究所(1906年、関西美術院に発展)に入所します。当時の安井のデッサン力は粗削りながら抜きんでいたといいます。先に入所していた梅原龍三郎は次のように回想します。「新入の彼は皆の様に頭が胴の何分の一などと割り出す事を知らず頗る頭でつかちを描いたが、恐らく初めて使つただらう木炭の色がすばらしくさえ輝いて頗る生気に満ちたデッサンを描き上げた。(中略)又其頃皆がした様に鉛筆で景色の写生をして来た。北野の森であつたかと思ふが森の説明がなく毛筆の穂先の重さなりの様なものを描いて来た。然し其処には初歩の誰もが達し得ない美しいリズムがあつた」。

安井の力強い個性は、デッサンの勉強を重ねるごとに力強く磨かれていきます。本作はまさにこの頃に描かれたデッサンです。

16.安井曾太郎 街の風景

1908(明治 41)年 油彩、カンヴァス 55.0×46.0cm

Sotaro Yasui, *City scape*



1907(明治 40)年4月、19歳の安井は関西美術院の同窓生である津田清楓とともに船でパリに向かいます。パリではアカデミー・ジュリアンに通い、ジャン=ポール・ローランスの指導を受けます。「ローランスは形とヴァラル(引用註：色価)に厳しく基礎修行には實によい先生だった。僕は教室では油絵よりもデッ

サンを多く描いた」と安井自身述べています。教室内で安井のデッサン力は際立っており、コンクールでは一等賞を受賞、入選を繰り返したといいます。安井はそこで3年間、デッサンの鍛錬を続けました。

本作はフランス到着の翌年、おそらくパリの街を描いたものです。比較的抑えられた色彩ながら、画面左に壁を描く大胆な画面構成には、間もなく安井の心を捉えるセザンヌと共通する問題意識が感じられます。

17. 安井曾太郎 レースを編む女

1913(大正2)年 水彩、紙 24.6×17.4cm

Sotaro Yasui, *Lady knitting lace*



1910(明治43)年4月頃、3年間通ったアカデミー・ジュリアンを辞め、自由研究に入った安井はモデルを用いた制作を本格的にはじめます。本作に描かれたモデルはこの時期の安井作品に度々登場するフランス人女性です。小さな水彩画ですが、一筆ごとに重ねていく構成的なタッチにはセザンヌの影響を感じさせます。

安井は渡欧直後の1907(明治40)年、没後間もなく開かれたセザンヌ展を見ました。しかし、そのときは「セザンヌといふ名前さへ知らなかつた私でしたから、十分には分かりませんでした。只青黒い、するどい絵だつたといふ印象が残つてゐます」という程度でした。しかし、その2,3年後にセザンヌのコレクションを見たときには、セザンヌへのまなざしは大きく変わっていました。本作はセザンヌに影響を受けた後に描かれた作品です。

18. 安井曾太郎 スケッチブック

1908-1911(明治41-44)年頃 木炭、紙 45.5×91.0cm

Sotaro Yasui, *Sketchbook*



パリに留学した安井はアカデミー・ジュリアンに通い徹底してデッサンを学びながら、津田清楓らとパリ郊外に滞在して制作を重ねます。その頃、安井はミレーやピサロの絵に強く魅かれていました。1910(明治43)年の清楓宛書簡には、「此の頃はピサロとミレーとが頭の中を占領してゐて、それ以外のどの畫を見ても気に入らないから困る。然しこれからどない變わるか知らぬけれど、當分はこのチョウシだらう」と記されています。

この滞欧中のスケッチブックには、農作業をする人々が描かれており、ミレーの影響を見

ることができます。そこには同様にミレーに憧れていたゴッホとの類似性も指摘することができます。

19.安井曾太郎 小高き丘

1913(大正 2)年 油彩、カンヴァス 35.0×38.0cm

Sotaro Yasui, *Small hill*

1913(大正 2)年夏、安井はフランス中南部オーヴェルニュのアンベールに滞在しました。この地域は山が多く、古くからの歴史と文化が息づいています。ここで安井はいくつかの風景画を描きましたが、本作はその一つです。立方体のような家々が並ぶその画面構成は、セザンヌやその影響を受けたキュビズムの絵画を想起させます。

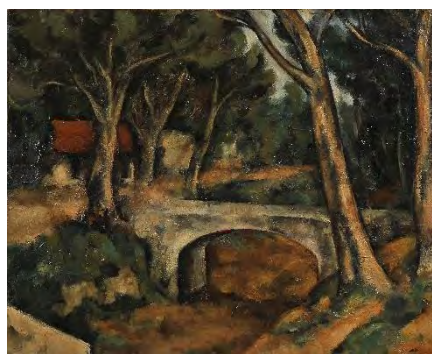
安井はこの数年前、コレクターであるオーギュスト・ペルランのセザンヌ・コレクションを見て、感銘を受けました。「セザンヌが本当に好きになったのは、二、三年の後、ペルラン・コレクションを見た時からです。(中略)そしてそのコレクションのある家から外へ出ても、その^{わき}の景色や、道行く人なんか、皆セザンヌの^え繪に見えました。自然はセザンヌの^え繪の連続で、それだけ忠實に^{ちようじつ}に寫實せられたのに驚き感心しました」。この小さな風景画には、安井のセザンヌへのまなざしが重なるかのようです。



20.安井曾太郎 風景

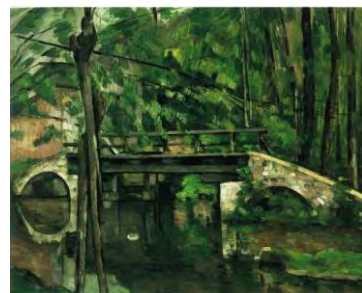
1915(大正 4)年 油彩、カンヴァス 53.0×65.5cm

Sotaro Yasui, *Landscape*



滞欧 7 年目の 1914(大正 3)年、意欲的に制作を続けていた安井は肺を病み体調がすぐれない日が続きます。加えて第一次世界大戦の勃発により帰国を余儀なくされました。同年 9 月、ロンドンから船に乗った安井は寄港地の南仏マルセイユで、セザンヌが暮らしたエクス=アン=プロヴァンスを訪ねました。そのときのことを次のように回想します。「セザヌは^あらい人だと思ふた。山、道、木、家、草、空、人、牛……見るもの皆セザヌの^え画であつた。セザヌは泥棒であつた。セザヌと自然との間にどれだけのへだてがあらう！」

滞欧 7 年目の 1914(大正 3)年、意欲的に制作を続けていた安井は肺を病み体調がすぐれない日が続きます。加えて第一次世界大戦の勃発により帰国を余儀なくされました。同年 9 月、ロンドンから船に乗った安井は寄港地の南仏マルセイユで、セザンヌが暮らしたエクス=アン=プロヴァンスを訪ねました。そのときのことを次のように回



【参考図版】ポール・セザンヌ《マンシー橋》
1879-80 年 オルセー美術館蔵

本作は安井が帰国翌年に描いた作品です。輪郭や境界線の扱いは初期のセザンヌを連想させ、構図やモチーフはセザンヌ《マンシー橋》と重なります。安井はこの後、長いスランプに陥り、明瞭な色彩構成による独自の表現を確立するのはおよそ十年後のことです。

一須田国太郎 伝統絵画を学ぶ

21. 須田国太郎 スケッチブック

1908(明治41)年 鉛筆・水彩・ペン・コンテ他、紙 14.2×18.8cm

Kunitaro Suda, *Sketchbook*



このスケッチは須田が17歳頃に描いたものです。画面左上には「京都青年会館楼上より」と記されており、薄暗い夕暮れに浮かぶ街の光に須田の瑞々しい感性が垣間見えます。

須田は13歳頃から友人と手書きの同人雑誌『竹馬の友』を発行し、エッセイや芸術評論のほか、独学で描いた自身のスケッチなどを掲載します。1907(明治40)年、16歳の頃には京都三条通に書店・丸善の京都支店が開店。そこで見たゴッホの絵に感銘を受け、「模倣でない仕事を、それが新しいものであることを念願した。そしてそれが自分にも出来るというような自信がある気がした」と回想しています。

3歳年上の梅原龍三郎や安井曾太郎と異なり、須田は画塾に学ぶことなく、22歳で京都帝国大学(現・京都大学)へ進学します。

22. 須田国太郎 丹羽口

1914(大正3)年 油彩、カンヴァス 45.5×33.8cm

Kunitaro Suda, *Tanbaguchi*

「それにしても、なぜ東洋西洋と違った方向にむいて絵が発達したのだろう。その違いは、我々の新しいものの要求は、その総合の上に立つのではないか、それを大学で研究したいと考えた」。1913(大正2)年、須田は京都帝国大学に入学し、美学者・深田康算のもとで美学美術史を学びます。その頃、独学で油彩画を始めますが、大学2年目に描いたのがこの作品です。その画風は印象派のような明るい色彩やタッチで描かれ、初々しい感性に満ちています。

大学院へ進み研究を深めるうち、渡欧への思いは募りますが、時は第一次世界大戦の只中でした。ちょうどその頃、ドイツ語の教師に絵を見せると独学を諫



められ、26 歳にして関西美術院への入学を決意します。既に浅井忠は没し、梅原龍三郎、安井曾太郎は約十年前に卒業。研究生が2, 3 人の「暗黒時代」だったといいますが、須田は十代の青年に交じってデッサンを学びます。そして、大戦が終結した 1918(大正 7)年、大学院を中退してヨーロッパに向かいます。

23.須田国太郎 滞欧期写真 スペイン アヴィラ サン=ヴィセンテ聖堂南門

1920(大正 9)年 10 月 12 日頃撮影、プリント時期不明

写真 25.0×30.0cm

Kunitaro Suda, *Photograph from his time in Europe*

24.須田国太郎 聖母像、サン・ヴィセンテ聖堂 滞欧期デッサン

1920(大正 9)年 鉛筆、紙 27.8×23.7cm

Kunitaro Suda, *Statue of the Virgin Mary, San Vicente Basilica*

No Image

No Image

1918(大正 7)年に京都帝国大学大学院を退学した須田は翌年、船でヨーロッパに向かいます。途中、インドで1 週間寄港したときにはアジャンターの石窟などを見て回りました。その後、ロンドンやパリを経由して向かったのはスペインでした。「ここではあのプラド美術館を見学することが其の最大の希望であった。プラドの内容は予想を裏切らぬもので狂喜して日参した」。須田は4 年間の滞欧中、欧州各国の美術館を訪れて、模写を重ねました。

また須田は渡欧時にカメラを持参し、風景や美術品などを撮影しました。当館では須田がプリントした紙焼きを約 100 枚収蔵していますが、その一つがこの写真です。写っているのはスペインのアヴィラにあるサン・ヴィセンテ聖堂の南門を飾る「受胎告知」のレリーフ。写真は左右反転していますが、須田の写真とスケッチがともに残っている貴重な作例です。こうした事例からは須田が滞欧期に西洋美術を多角的に研究していたことが分かります。

25.須田国太郎 山の斜面

1920(大正 9)年 油彩、カンヴァス 53.0×65.0cm

Kunitaro Suda, *Mountain slope*



須田は 1919(大正 8)年、28 歳でスペインに渡り 4 年間欧州に滞在しますが、その間に各地を巡って風景を描きます。本作もそうした作品の一つです。場所は特定されていませんが、1920(大正 9)年秋にスペイン北西部を旅したときに描かれたものと思われます。

画面は右側からの光によって強い陰影が生まれています。赤茶色の大地とその陰の重なりは複雑なリズムを生み、左

上に向かうごとにブルーグレーの色彩に変化していき、独特の空間を生み出しています。こうした特徴は《丹波口風景》など、渡欧前の作品には見られないものであり、古典絵画の模写や研究を通じて、独自の世界観が生み出されたことが分かります。

須田は帰国後、京都帝国大学などの講師を務めますが、画家としての初めての個展は41歳のときです。銀座・資生堂画廊で開かれたその初個展には本作も展示されました。



【参考図版】
須田国太郎第1回個展(1932年)の会場風景。
右手前壁には《山の斜面》が展示されている

26. 須田国太郎 モヘンテ

1922(大正11)年 油彩、カンヴァス 39.5×51.5cm

Kunitaro Suda, *Mogente*



1922(大正11)年7月20日、須田はスペインのバレンシア州にあるモヘンテを訪れました。同日の日記には「お寺の横から小さな谷をかく」とありますが、本作のことと思われる。

谷の向こうにはモヘンテの街並みが見えます。上辺にわずかに空を描き、街並みを立方体のように描く手法はセザンヌやキュビスムの絵画を想起させますが、赤茶色の大地の美しいトーンはどこか伝統絵画を想起させます。

この絵を描いた翌日と思われるモヘンテでの日記には次のように記されています。「二十一日 金(中略) ほぼかき終わる タくれとなる 村には灯が入る 停車場のはずれの芝生でねころぶ 星がみえる むすめ達が歌いながら通って行く この辺のは皆白服なので遠く行くまで見えてる 自分ののる汽車のくる頃はとっぴり暮れる」。この風景画とともにその記述を見ると、まだ何者でもない若き須田が百年ほど前に目にしたスペインの情景が甦るかのようです。

27. 須田国太郎 滞欧期写真

1919-23(大正8-12)年頃 写真 25.0×30.0cm

Kunitaro Suda, *Photograph from his time in Europe*

1922(大正11)年10月3日、須田はスペインのサラゴサ州にあるピリャフェリチェを訪



れました。翌日、その近郊のダロカ附近から撮影したのがこの写真です。滞欧時に紙焼きした同じ写真(参考写真)の裏面には、「ここでこの写真をとったところへ 憲兵が来て撮影許可をもって居られるかと聞かれてコレワえらいことになったと思った」と記されています。当時、地方で風景写真を撮ることはまだ珍しかったのかもしれません。

当時の写真と比較すると、

この写真は左右反転の上、トリミングされていることが分かります。空を狭く取るその構図は風景画にも類似しており、この写真は須田が帰国後、研究のために紙焼きしたものと考えられます。

【参考写真】

須田国太郎「ビリャフェリチェ ダロカ附近
(スペイン・サラゴサ)」1922(大正 11) 年
三之瀬御本陣芸術文化館、8.0×10.5cm



28. 須田国太郎 モントン遠望

1922(大正 11)年 油彩、カンヴァス 65.0×80.0cm

Kunitaro Suda, *Distance view of Montón*



1922(大正 11)年 9 月 26 日にサラゴサ州ダロカに到着した須田は 10 月 3 日と 4 日、ビリャフェリチェを鉄道で訪れます(27.の滞欧期写真参照)。10 月 3 日に到着した須田は、そのままおよそ 1km 離れたモントンまで行き、昼食後にビリャフェリチェへ戻って、おそらく本作を描きました。本作の画面左に白く見える小さな集落がモントンと思われま。須田はこの地の印象を「付近の山の色は何と言

う白いことだろう 白灰色だ そして下の方は急にはっきり層をなして赭土色となっている もちろん樹木は一本もない」と日記に記しています。色面により絵画空間を生み出すその手法はセザンヌの絵画をも連想させます。

滞欧期の風景画は、模写を通じて学んだ伝統的な絵画技法をどのように自らの芸術に展開するかを試みであったのかもしれません。須田は 4 年間の滞欧を経て 32 歳で帰国。その後、大学の講師などを務めながら絵を描きますが、画家として立つ決意をするのは 41 歳になったときのことです。

ー印象派がはじまる

29.ポール・セザンヌ ウルビノ壺のある静物

1872-73 年 油彩、カンヴァス 45.0×55.0cm

Paul Cézanne, *Nature morte au vase dit d'Urbino*



本作はセザンヌが 33 歳頃に描いた静物画です。もともと暗い色彩を用いていたセザンヌはこの頃、先輩の画家ピサロと屋外で写生するなど、ともに制作することで色彩を明るくしていききました(参考写真)。

本作はセザンヌが 33 歳頃に描いた静物画です。もともと暗い色彩を用いていたセザンヌはこの頃、先輩の画家ピサロと屋外で写生するなど、ともに制作することで色彩を明るくしていききました(参考写真)。

本作はセザンヌがピサロとともにしばしば訪れた医師ポール・ガシェの家で描かれた作品です。布の上の果物と西洋トマト、色鮮やかなマヨルカ焼の壺は、空中に浮かび上がるような不思議な存在感を放ちます。セザンヌはこの絵を描いた翌年、後に「印象派展」と呼ばれる展覧会に《首吊りの家》、《モデルヌ・オランピア》などを出品し、世間に驚きを与えました。この時期、新しい絵を描こうとする画家たちが出会い、切磋琢磨することで、「印象派」が生まれます。



【参考写真】

写生に向かうセザンヌ(左)とピサロ(右)。
オーヴェールにて、1873 年頃

画像出典：Pissarro, Critical Catalogue of Paintings, vol.1, Skira, Wildenstein Institute Publications, 2005.

30.オーギュスト・ルノワール アルジャントウイユの橋

1873 年 油彩、カンヴァス 46.0×63.0cm

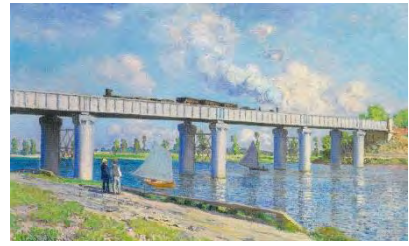
Pierre-Auguste Renoir, *Pont du chemin de fer à Argenteuil*



セーヌ川を吹き抜ける風が、水面をきらめかせます。本作はルノワール 32 歳の作品。この頃、ルノワールはモネと並んで屋外での制作を重ねました。屋内で丁寧に絵具を塗るのが当たり前だった時代、二人の新たな表現は理解されません。翌年モネやルノワール、ピサロ、セザンヌらが自主的な展覧会を開きます。彼らの絵は完成ではなく「印象に過ぎない」と嘲笑され、そこから「印象派」がはじまります。本作は印象派誕生の前年、ルノワールがモネと並んで描いた作品です。

本作は印象派誕生の前年、ルノワールがモネと並んで描いた作品です。

美術史家ケネス・クラークは、「モネとルノワールがアルジャントウイユで制作した絵において、感覚の絵画はそのもっとも完璧な成果を生み出した」と評しています。何もののにも捉われないその自由な感覚は、近代へと至る時代の変革をも垣間見るかのようです。



【参考図版】
クロード・モネ《アルジャントウイユの鉄道橋》
1873年 個人蔵

【近代館 第2展示室】 画家たちのそれから



一梅原龍三郎 天衣無縫

1. 梅原龍三郎 薔薇図

1940(昭和15)年 油彩・岩彩、カンヴァス 56.2×29.6cm

Ryuzaburo Umehara, *Roses*

No Image

明時代の「万曆赤絵壺」に薔薇が活けられています。50代になった梅原は1939(昭和14)年に北京を訪れて以来、その風土に魅了されて度々、同地を訪ねました。北京では骨董収集も行いましたが、そうして入手したものの一つがこの壺です。壺は画面左からの光を浴びて立体的なヴォリュームをあらわしていますが、赤絵の平面的なリズムは、そのままバラの鮮やかな色彩に繋がります。それは西洋の明暗表現と東洋の装飾性が豊かに融合するかのようです。

20歳で渡仏してルノワールに多くを学んだ梅原は、帰国後、自らの芸術をどのように確立していくか苦闘します。やがて大和絵や浮世絵、琳派など日本古来の伝統絵画や古美術に学ぶことで、独自の表現を見出していきました。油彩画と日本画材を併用した本作には、西洋や東洋などジャンルを越えた豊かな芸術性が息づいています。

2.梅原龍三郎 北京長安街

1939(昭和14)年 岩彩・油彩、紙 40.0×65.5cm

Ryuzaburo Umehara, *Chang'an Avenue in Beijing*

昭和14(1939)年8月、51歳の梅原は満州美術展の審査の帰路、初めて北京を訪れ、紫禁城が見える北京飯店5階に宿泊します。その眺めは美しく、到着日の日記には「誠に夢の國なり」と記されています。梅原はその後、戦争が激しくなる昭和18(1943)年まで毎年この地を訪れました。梅原は後に北京での制作について、「今日迄の自分の生活のうち最も楽しく充実した機会であった」と回想しています。

No Image

本作は初めて北京に滞在した時に描かれた風景です。暑い夏、空は遠くまで澄み、木陰には爽やかな風が吹き抜けるかのようです。乾燥した大地に広がる豊かな緑は、日本画材の岩絵具「緑青」が用いられています。梅原は帰国後、油彩画と日本画材を併用することで独自の世界を生み出していきます。

3.梅原龍三郎 富士

1945(昭和20)年 油彩・岩彩、紙 78.1×65.0cm

Ryuzaburo Umehara, *Mt. Fuji*

厳冬の明け方、薄明かりに照らされた富士が堂々とした姿を浮かび上がらせます。画面右から差す柔らかな光は富士の裾野や伊豆の大地を淡いピンクに染め上げます。冬の冷たい空気の中に聳える富士は、朝日によって輪郭を鮮やかにしながら堂々とした姿を暗がりからあらわします。一見大胆に見える描写の中に、繊細な光が息づくその表現は、徹底した観察にもとづきます。そこには20代のときに出会った師ルノワールの「*画を成すのは手でない眼だ、自然をよく御覧なさい*」という言葉が息づくかのようです。

梅原は1943(昭和18)年に伊豆長岡の古奈温泉に疎開し、翌年には大仁ホテルで制作するようになりました。本作は、終戦間近の1945(昭和20)年1月に大仁ホテルから描かれたものです。梅原が富士を描くようすを見た小林秀雄は、その姿を「厳冬、朝暗いうちに起き、富士に向う窓を開け放ち、防寒具に身を固め、富士が朝日を浴びるのを待つ有様だった」と記しています。

4. 梅原龍三郎 富士山図

岩彩、絹(金地) 24.3×27.1cm

Ryuzaburo Umehara, *Mt. Fuji*

No Image

小さな画面に輝くような風景が詰め込まれています。本作は戦後、大仁ホテルから見た富士の眺めです。荒い岩絵具で描かれた青い富士と狩野川、暖色の低山と近景が織りなすコントラストが鮮やかで、絹に塗られた下地の金の輝きがその効果をいっそう引き出しています。梅原は戦後、油彩画や日本画などに枠にとらわれることなく、より自由な表現を展開していきました。

—安井曾太郎 レアリスムの追及

5. 安井曾太郎 薔薇

1931(昭和6)年 油彩、カンヴァス 60.5×48.8cm

Soutaro Yasui, *Roses*

彩り豊かな薔薇が力強い形をした花瓶に生けられています。



画面は白系の色彩で構成されており、彩り豊かな薔薇の力強い生命を浮かび上がらせます。

1914(大正3)年、7年間のフランス滞在を終えて日本へ帰国すると、風土や画材の違いから十年ほど思うように絵が描けなくなります。30代半ばには関東大震災や生家の経営難、実兄の死など多くの困難に直面しました。しかし、この頃から「安井様式」と呼ばれる力強い画風の端緒があらわれます。

ここに描かれている風変わりな花瓶は、安井の妻・はまの実家にあったものです。「この花生は、震災直後、家内の實家の焼跡で見つけたもので、以前はどんなものだったか知らないが、焼けたためちょっと面白くなったのではないかと考えている」。「その時分僕は白色を好んだ。しぜんその時代の作品に白色調のものが多く、この繪もその一つであった」。そう安井は述べています。鮮やかな薔薇の花は愚直なまでの安井のまなざしを感じさせます。



6. 安井曾太郎 銀化せる鯛

1953(昭和28)年 油彩、カンヴァス 65.0×54.0cm

Soutaro Yasui, *Silvered sea bream*

銀色の鯛が画面いっぱいに描かれています。鯛はまるで壁に掛けられるかのようにですが、実際には皿に置かれた鯛が真上から捉えられています。

戦後、湯河原に居を構えた安井は、お正月に熱海の知人から赤い鯛を貰いました。当初は少し写生して食べるつもりでしたが、筆の遅い安井が描き始めると、どんどん時が経っていきます。そして、ついには5月となり、鯛は腐って干物のようになってしまいました。家族はその匂いに近づけなかったといいますが、安井はかえってそれに美を見出します。「干物になった鯛は亦美しかつた。色は銀色になり、はつきりした面がきれいにとれていて、優れた彫刻の様だつた」。そして完成したのがこの作品です。「ほんとに腐つても鯛は美しかつた」。家族にとって、単なる腐った「もの」でしかなかった鯛は、安井のまなざしを通して、美しい彫刻のように輝きはじめます。

7. 安井曾太郎 緑の風景

1955(昭和30)年 油彩、カンヴァス 32.0×40.0cm

Sotaro Yasui, *Green landscape*

1954(昭和29)年8月、66歳になった安井は湯河原の山上に自宅兼アトリエを新築します。そこから眺める湯河原の山々は安井を魅了しました。安井は「湯河原の新畫室からは、僕の好きな山がすこしばかり見える。その山の形は、ブリジストン美術館にあるセザンヌのサント・ピクトワール山に一寸似ている。仲々いい山である」と述べています。



1914(大正 3)年、27 歳の安井はフランスから帰国する際、セザンヌの故郷エクス=アン=プロヴァンスに立ち寄り、サント=ヴィクトワール山を目にしました。そのときのことを「山、道、木、家、草、空、人、牛……見るもの皆セザンヌの画であつた。セザンヌは泥棒であつた。セザンヌと自然との間にどれだけのへだてがあらう！」と述べています。そして最晩年に描いたのがこの風景画です。安井は同年秋、同じ風景に取り組みますが、その際に風邪をこらせ、帰らぬ人となりました。この湯河原の山は、安井にとって青春と晩年を豊かに繋ぐ大切な山だったのかもしれません。

一須田国太郎 陰影の絵画

8. 須田国太郎 静物



1935(昭和 10)年 油彩、カンヴァス 64.5×53.0cm
Kunitaro Suda, *Still life*

1923(大正 12)年、約 5 年の滞欧を経て帰国した 32 歳の須田は翌年、和歌山高等商業学校(現・和歌山大学)や母校の京都帝国大学(現・京都大学)の講師を務めるなど、大学講師として生計を立てはじめます。また、同年末には結婚をしたため、「画家としての独立の生計などは思いも寄らぬところであった」といいます。そうして 9 年が過ぎた頃、友人の日本画家・神坂松濤の勧めで、1932(昭和 7)年に東京銀座の資生堂画廊で初めての個展を開きます。41 歳のときでした。しかし、「無名の悲しさ、先ず完全なる黙殺を喫した」といいます。そうした中でも画家の川口軌外、里見勝蔵が来場、その誘いにより独立美術協会に入り、ようやく画家として立つこととなります。

本作はその 3 年後、気力ともに充実した時期の油彩画です。果物籠の傍らに薔薇が一輪置かれ、それを目にすると影の中から光が浮かび上がります。一見暗い画面には、西洋の明暗表現と東洋の詩的空間が融合する須田絵画の静かな魅力が広がっています。

9. 須田国太郎 農村展望(小諸風景)

1934(昭和 9)年 油彩、カンヴァス 59.0×90.0cm
Kunitaro Suda, *Rural View (Komoro landscape)*

1934(昭和 7)年 9 月、41 歳にして初めての個展を開いた須田は、ようやく画家としての道を歩み始めます。その直前の 7 月、上田や長野など信州を旅行したときに描いたのが本作です。



みはるかす山々の向こうに夏の雲が湧き立ち、眼下には山影が広がります。近景の影と遠景の光の対比によるダイナミックな画面構成は、須田が学んだティントレットなど伝統絵画の構図を想起させます。影には緑や赤など色が重層的に塗られ、これらの色彩に気づくと山々が夏の光にいっそう輝きます。初個展を控えた須田は、本作においてスペインで学んだ伝統絵画の手法と日本の風景を融合させようと試みたのかもしれませんが。本作は 2 か月後の初個展に《山の村》として出品されました。

10. 須田国太郎 薔薇

1950(昭和 25)年頃 油彩、カンヴァス 37.8×45.3cm

Kunitaro Suda, *Roses*



赤い薔薇が曖昧な空間に浮かび上がります。一見暗い画面ですが、背景に浮かぶ蕾^{つぼみ}をじっくりと見てみると、深い空間が立ち上がり、薔薇の赤が鮮やかに輝き始めます。複雑に重なる色彩には画家の深い精神性が宿るかのようです。

須田は母校の京都帝国大学で長く講師を務め、美術史を教えました。その学生の一に作家の井上靖がいました。井上によると、須田の「講義の仕方にも、態度物腰にも、身に着けている雰囲気にも、一種老成したものがあつた」といいます。井上は後に須田の油彩画《野薔薇》を入手し愛蔵しました。「薔薇を描いて、これほど東洋的な静けさを出せる画家は須田さん以外ないのではないかと思う」と述べています。本作もまた、西洋の伝統を深く学んだ須田こそが生み出すことのできる「東洋的な静けさ」が広がっています。

一印象派の展開

11. ポール・セザンヌ 水浴する人々

1897 年 リトグラフ、紙 43.0×52.0cm

Paul Cézanne, *Baigneurs*

セザンヌは 1870 年代に印象派の画家として知られるようになりますが、自身はそこに留まらず、「印象主義から、美術館の芸術のようにより堅固で永続的な芸術を創り出す」ことを望みました。

本作にはセザンヌの後年の主要なテーマとなった「水



浴図」と故郷のサント・ヴィクトワール山、双方が描かれています。画中の不思議なポーズをとる人々はルーヴル美術館の古代彫刻や同時代の絵画に想を得たもの。瑞々しい風景はセザンヌの少年時代の思い出が出发点です。セザンヌは現実の風景に古代彫刻などさまざまな要素を詰め込むことで、印象派の鮮やかな色彩を永遠性をもつ芸術へ昇華しようとするかのようです。

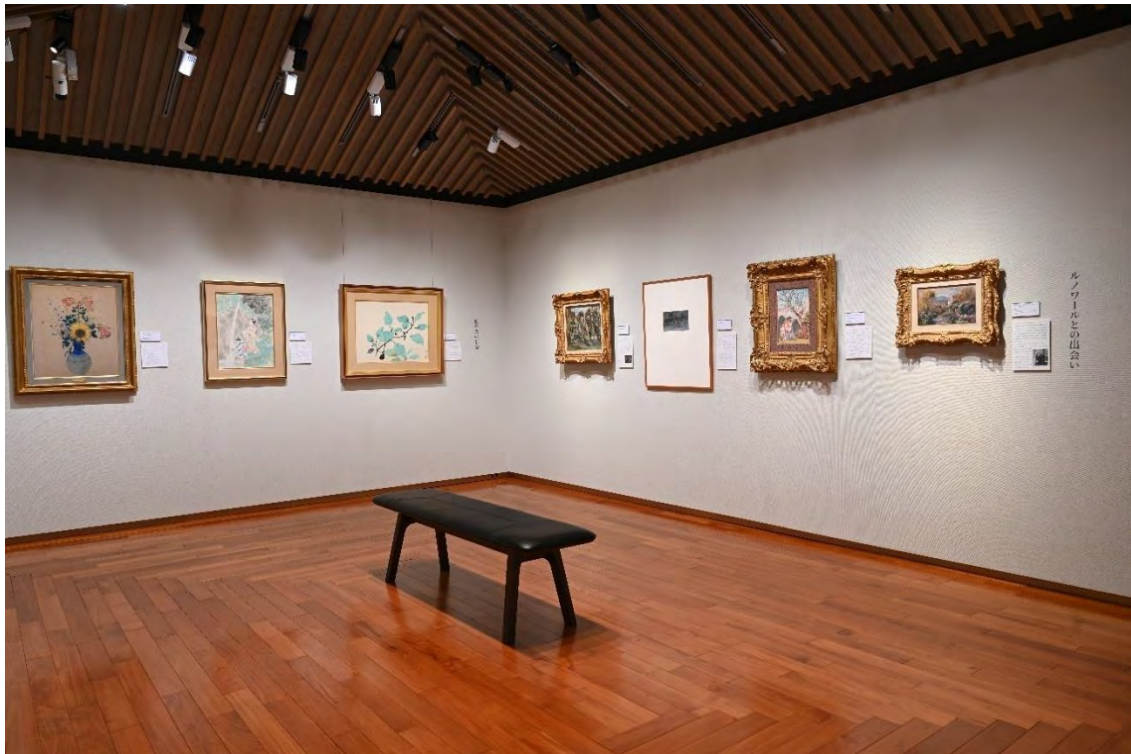
12.オーギュスト・ルノワール バラをつけたガブリエル

1906-19 年頃 油彩、カンヴァス 28.4×26.7cm



Pierre-Auguste Renoir, *Gabrielle à la rose*

1870 年代に印象派の画家として知られたルノワールですが、1880 年代になると色彩を筆触ごとに分割するその表現に行き詰まりを感じるようになります。ルノワール自身、「1883 年ごろ、私の作品の中に一つの断絶が訪れた。印象主義をとことんまで追いつめていった結果、自分はもう絵を描くこともデッサンをすることもできないのではないかという結論に達した。つまり一口に言えば、私は袋小路に入ってしまったのだ」と述べています。そうした中、ルノワールはイタリアを訪れて、ラファエロなどの古典絵画やポンペイの壁画などに感銘を受けながら自らの道を模索します。そして印象派の鮮やかな色彩を残しながら、透明な油彩絵具を塗り重ねていく独自の技法で描くようになります。本作はルノワール 60 代の作品。薄めた絵具と鮮やかな色彩、透明な上塗りを重ねる技法は、ガブリエルの生き生きとした生命力を見事に描き出しています。

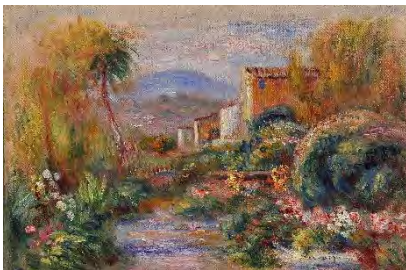


【近代館 第3展示室】

ールノワールとの出会い

1.オーギュスト・ルノワール カーニュ風景

1905年 油彩、カンヴァス 20.5×31.0cm



Pierre-Auguste Renoir, *Paysage à Cagnes*

40代頃からリウマチを患っていたルノワールは、医師の勧めもあり、50代後半から冬に温暖な南仏のカーニュ＝シュル＝メールを訪れます。この地を気に入ったルノワールは1903年、市街地に家を借りて家族とともに移り住みました。本作はその周辺の風景です。画面全体に漂う赤紫の色彩は、艶やかで透明感のある緑と鮮やかな対比をなし、南仏の心地よい気候をあらわします。

1907年、66歳のルノワールは丘の上にあるオリーブ畑を買い取り、コレット荘と名付けてアトリエ兼住居としました。ここには梅原龍三郎をはじめ、安井曾太郎やマティス、マルケなど多くの画家たちが訪ねました。ルノワールはリウマチで手が曲がるほどであった

にもかかわらず、ここで多くの名作を生み出していきます。

2.梅原龍三郎 パリス審判図

1955(昭和 30)年 岩彩、紙 34.9×24.2cm

Ryuzaburo Umehara, *Judgement of Paris*

No Image

ルノワールは晩年、ギリシャ神話の「パリスの審判」をテーマに大作を数点、描きました。師ルノワールの訃報を聞き、弔問に訪れた 30 代の梅原は、そこでルノワールの《パリスの審判》を目にします。「絶筆のレモン三つが六号大に半描きなのが画室の壁に画鋸で軽く張つてある、画室の三方の壁、明かり窓の傍の欄間にもすき間なく晩年の画布がピンで張つてある。五十号位のパリス審判図のほゞ同図なのが三つもあり、裸婦、花、景色大小無数がうなりを発して輝いてゐる」。その印象は梅原の脳裏に残り、90 代になるま

で度々、画題としました。67 歳の梅原が日本画材で描いた本作には、歳を重ねて抱く師ルノワールへの敬愛が垣間見えるかのようです。

3.山本正道 ルノワールの庭

2010(平成 22)年 鉛筆、紙 18.5×25.0cm

Masamichi Yamamoto, *Garden of Renoir*

彫刻家・山本正道は 2009 年、上原美術館にて開催された企画展『梅原龍三郎とルノワールー出会いから 100 年ー』（2009 年 9 月 16 日～2010 年 1 月 13 日）で画家たちの出会いに感銘を受け、南仏



カーニュ＝シュル＝メールのルノワール邸(現・ルノワール美術館)を訪ねます。百年前に若き梅原龍三郎が歩いた坂を上り、美術館に辿り着くと、その眺めに心を打たれました。「起伏のある庭に太い根を下ろしたオリーブの巨木群を目の当たりにして、私は今迄イメージとして持っていたオリーブの樹の印象とはまるで違う迫力に感動した」。そして山本は目の前に広がる風景のスケッチに没頭します。正午を廻り慌てて立ち上がると、いつの間にか昼の休館時間で園内に閉じ込められてしまいました。期せずして園内でひとりになった山本はオリーブの木々に囲まれ、デッサンを続けます。そして生まれたのがこの作品です。数百年を越えるオリーブの老木はさまざまな芸術家の出あいに寄り添いながら、今も静かに立ち並んでいます。

4.アンリ・マティス 赤い屋根のある風景

1920 年頃 油彩、カンヴァス 38.0×45.6cm

Henri Matisse, *Paysage au toit rouge*

1917 年末、南仏ニースに拠点を移したマティスは、近郊のカーニュ=シュル=メールに住むルノワールを訪ねます。リウマチに苦しみながらも描き続けるルノワールの姿は、生涯を通じてマティスを勇気づけます。



マティスがルノワールと出会ったのは、間もなく 50 代に差し掛かる頃。実験的な絵画に伝統の優美さを取り戻そうとする時期でした。赤と緑の色彩対比に、伝統絵画のような明暗のトーンを調和させた本作は、この頃に描かれたものです。マティスは印象派の色彩と伝統絵画の透明性を融合したルノワールの生き方に大きな影響を受けたマティスは、1920 年に梅原に会ったとき、「自分がルノワールを識つたのは近年である、君が早くから彼と識つたのは羨しい」と語ったといいます。

一夏をたのしむ

5. 小林古徑 茄子

1947(昭和 22)年 紙本彩色、額装 27.8×18.2cm

Kokei Kobayashi, *Eggplant*



大きな余白の空間に茄子の枝が立ち上がります。大きな葉は生き生きと広がり、新芽や少し枯れかけた葉も描かれています。紫の花が一輪咲き、茄子の実がひとつ、なっています。それらは単純な描写ですが、枝の堅さや実の重さまで想起させ、余白には夏の空気が漂うかのようです。

古徑の線はしばしば高く評価されますが、それは余白とのバランスによって大きな効果を生み出しています。哲学者の谷川徹三は古徑の作品を評して、人混みの中でさえ「古徑の絵の周囲が、そこだけ何か異種の空気につつまれてしんとしているという感じである」と述べています。

6. 鏑木清方 不動の瀧 新収蔵・初公開

紙本彩色、額装 57.5×41.4

Kiyokata Kaburaki, *Fudo(Acala)-no-Taki Falls*

涼を求めて滝の元へやってきた若い二人の女性が描かれています。右に立つ女性は手拭いを手に、通り抜ける風を受け止めています。左の女性は、履物を草の上に脱ぎ、足を水に浸しながら落ちてくる水に手を差し伸べています。投げ出された日傘は暑い最中、急いで滝の元へと駆け寄る女性の気持ちをあらわすかのようです。青々とした草木や、岩肌に咲く山百合は盛夏であることを感じさせます。滝の上には不動明王の石像が置かれ、行場でもあることを暗示します。

鏑木清方は江戸の名残を留める明治時代の情景をこよなく愛しました。清方晩年の本作には、古き時代への憧憬が垣間見えます。



7. オディロン・ルドン ひまわりのある花束

1910-14 年 パステル、紙 18.4×27.0cm

Odilon Redon, *Le bouquet au tournesol*

青く絵付けされた花瓶に一輪の大きなひまわりが生けられています。ピンクの花はキルトンサスでしょうか、マーガレットのような小さな花々も飾られています。ひまわりをはじめ夏の花々は、どこか季節を超越した凜とした存在感を漂わせています。

ルドンは69歳のときに妻カミーユの姉から引き継いだヴェルサイユ近郊の田舎町ビエーヴルの家に移り住み、静かな時を過ごします。そこでは庭に咲いた花々や、カミーユが摘んだ花を花瓶に生けて絵を描きました。色とりどりの花々は、ルドン晩年の愛情あふれる穏やかな暮らしそのもののよう、美しく咲き誇っています。

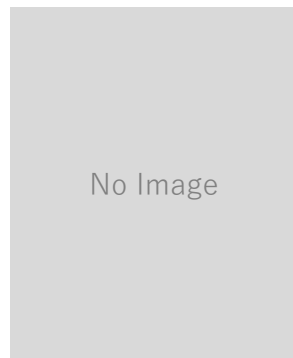
一花をささげる

8. カミーユ・ピサロ エラニーの牧場

1885 年 油彩、カンヴァス 54.5×65.5cm

Camille Pissarro, *Prairie d'Eragny*

青々とした牧草が広がる風景の中に、リンゴの木が白い花を咲かせています。ピサロが暮らした小村エラニー＝シュル＝エプトは、リンゴが名産品です。友人のモネは、ピサロにリンゴのお酒・シードルを送ってこないか、という手紙を



送っています。ピサロが暮らした家もリンゴ農家を改造した家で、本作もその庭先の風景です。リンゴの花が咲き乱れる5月頃の瑞々しい香りが広がっています。

9. 香月泰男 鉄線花

1970(昭和45)年 油彩、カンヴァス 45.0×27.0cm

Yasuo Kazuki, *Clematis*

鉄線花、いわゆるクレマチスは夏に甘い香りを放ちます。一輪の花の微かな香りが感じられるこの画面からは、小さな生命を慈しむ画家のまなざしが垣間見えます。

香月は第二次世界大戦後、シベリアに抑留され過酷な体験をしました。帰国後は故郷の山口県・三隅町で戦争を画題にする傍ら、身近にある花など小さなものを愛情を込めて描きました。黒と黄土色の画面を主調とするシンプルな画面には、厳しい体験を経て生まれた香月のやさしさに溢れるようです。

No Image



10. 観世音菩薩像(興福寺千体仏)

平安時代後期(12世紀) 木造 彫眼 漆箔 像高 36.1cm

Kannon-bosatsu (Avalokitesvara)

奈良・興福寺にはかつて千体の小さな仏が安置されていたといわれ、それらは現在、興福寺千体仏の名で各地に所蔵されています。現存する仏像の作風はさまざまで、一か所で造られたものではないといわれています。平安時代後期には、たくさんの仏をつくり、奉納することが行われましたが、本像も藤原氏の氏寺であった興福寺に納められた仏像の一つと考えられます。平安後期の特徴であるおだやかな作風と、素朴な表情が愛らしい観音像です。

11. 岸田劉生 麗子微笑像

1921(大正10)年 水彩、紙 41.8×34.0cm

Ryusei Kishida, *Portrait of Reiko with a smile*

一輪の花を手を持つ少女が微笑みを湛えています。描かれているのは岸田劉生の愛娘、7歳の麗子です。1921(大正10)年9月30日の日記には、「麗子の例のメリンス(メリノウール)の赤と黄のシボリの美しいきものを着せて頭に先日の志那のかんざしをつけて、笑つてゐる半身像をはじめて、筆をおく」とあります。



劉生は生涯を通じて、麗子の像を70点以上描いています。劉生は麗子が生まれた日の日記に次のように記しています。「終に女兒生まれる。オギヤ、といふ声をきくとともに、ほつとした。嬉しかつた。只嬉しかつた。その声がたまらなく可愛く、たまらなく可憐に、肉体的に本能的に自分に感じられた」。麗子の不思議な微笑みの奥には、劉生の愛娘に向けた優しいまなざしが垣間見えます。



12. クロード・モネ 藁ぶき屋根の家

1879年 油彩、カンヴァス 48.5×64.5cm

Claude Monet, *La chaumière*

ポプラ並木に囲まれたレンガ造りの藁ぶき屋根の家。その手前には赤い薔薇や、黄色の花が鮮やかに咲き誇ります。自然の中に咲くその花々は、野趣あふれる香りを感じさせます。

本作はモネが住むヴェトウイユ郊外の小村ラヴァクールで描かれたものといわれています。モネはこの頃、絵具を塗り重ねずに分割して描くことで、さらに鮮やかな画面を求めていました。本作の花々も、近くでみると単なる絵具の点ですが、離れてみると鮮やかな花々が生き生きと目に飛び込んできます。

— 絵画は語る

13. パブロ・ピカソ 女の顔

1928年 リトグラフ、紙 26.5×19.5cm

Pablo Ruiz Picasso, *Visage*

凛とした表情の女性が正面を見つめています。彼女の名は 17 歳のマリー＝テレーズ・ワルテル。ピカソが 40 代半ばの時にパリの街角で出会い、その後、多くの絵でモデルを務めました。

この版画はコレクター上原昭二(1927 年一、現・大正製薬名誉会長)の駆け出しを飾るものです。東京薬学専門学校(現・東京薬科大学)を卒業した上原は、父・正吉が経営する大正製薬に入社します。そこで補佐役を務めたのが当時の副社長・田中広四郎氏です。岡山に生まれた田中氏は画家の兄を持ち、古美術にも精通する趣味人



でした。1966(昭和 41)年秋、38 歳の上原は田中氏に誘われて東京美術倶楽部の特別展に足を運びます。そこで知り合ったのが南天子画廊の青木治男氏でした。その紳士的な人柄に惹かれ、初めてピカソの版画《二人の裸婦》を購入。その後、渡欧する青木氏を通じて次に入手したのがこの版画です。上原が初めて購入した《二人の裸婦》は田中氏へ退職記念に贈呈したため、本作が現存する最初の上原コレクションです。

14. ジョルジュ・ルオー キリストとの親しき集い、ベタニヤ
1946 年 油彩、カンヴァス(板張り) 30.7×24.0cm

Georges-Henri Rouault, *Intimité chrétienne, Béthania*

花が飾られた部屋に親密な気配が漂います。入口に立つのはイエス・キリスト。部屋にいるのはマルタとマリアの姉妹です。イエスがベタニヤにある姉妹の家に立ち寄った際、マルタはもてなしのために働き、マリアはイエスの話に聞き入りました。マリアが手伝わないことをマルタがイエスに訴えると、イエスは「マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」と述べたといひます。

コレクター上原昭二は小学校高学年の時に島崎藤村全集を両親に買ってもらい、文学に目覚めました。青山学院中学部に入ると、そこで初めてキリスト教に触れて、その世界観が上原の視野を広げます。高校を卒業する頃には美学を志したいと思うようになりました。しかし、戦争は日ごと暗い影を落とし、上原は東京薬学専門学校(現・東京薬科大学)へ進みました。上原がこの絵を手に入れたのは 60 歳を過ぎてからのこと。ルオーが描くキリスト教の世界には、どこか上原コレクションの奥にある扉の向こうを垣間見えるかのようです。

No Image